

## はじめに

歴史は、不安定な均衡の期間がどのようにして驚くほど長期にわたって続き得るか、ということを私たちに教えてくれる。第一次世界大戦の際、西部戦線は三年半にわたり膠着状態が続いた。ソ連と米国の冷戦は四十年間も続いた。ギリシャは四世紀にわたってオスマン帝国の一部であった。したがって、私たちとしては、ユーロ危機の速やかな終息に関して間違った幻想を抱くべきではない。

欧州は統一を目指して通貨同盟の実験に乗り出した。このことに関連して、東西統一後のドイツを無害化かつ無力化し、二十世紀前半に欧州を荒廃させた古い悪魔への復帰を阻止することも目的であった。二〇〇七・〇八年に、世界は広範囲にわたる金融動乱に襲われ、それ以降の五年間にも及ぶ極度に精彩を欠いた危機管理を経て、欧州通貨の冒険物語は今やドイツを筆頭に巨額の対外黒字を累積した債権国と、南部周辺国を中心とする債務国との戦いに転化している。

ドイツは独マルクを喪失したり、あるいは独立的な中央銀行として有名なブンデスバンクが多国籍の欧州中央銀行に飲み込まれたりすることによって永久に無力化するどころか、今や欧州の政治や経済に対してどの国よりも大きな影響力を持っている。しかし、この明らかに強い立場のせいで、ドイツが極めて気まづくなっているという問題が生じている。かつて欧州で勢力を誇示した際の後悔あるいは危惧

にいまだに悩まされているドイツには、今や欧州指導者になるという欲求も能力もない。欧州地域において枢要な国であるドイツには、責任感はあるものの義務感はない。それが、ユーロ危機が解決する可能性が低い主要な理由の一つである。通貨という心臓に穴が開いている。責任者がいないのである。

新たな千年紀に向けて、通貨同盟は欧州の内部的な結束と有効性、および世界的な指導者としての証を改善するための冒険的な企てであった。本書ではそれが脱線してしまったことを説明したい。その理由は、一九九九年に創設されたユーロ・システムにかかわる設計上の欠陥——それは徐々に是正されつつあるが——から、もっと根本的で、各国それぞれの政治や経済、産業にかかわる文化の対立というほとんど解決不可能な問題に至るまで広範囲にわたる。さらなる障害は、政治家や単一通貨の管理を担当する技術官僚の濁った思考、想像力の欠如、そして明らかな無能などに由来している。このようなすべでの事情から、各国通貨を永久に融合するという課題は深刻な挫折に見舞われ、単一通貨は崩壊するのではないかという恐れが台頭している。欧州で最も上級の指導者さえそれを公言している。

ユーロの病を治す潜在力を持った合理的な方法が数多くある。これはユーロ圏の現メンバーの全員ないし一部が適切な政治同盟を創設することから、強者が弱者のために負担を増やすという形で債権国と債務国が平和協定を締結することまでと多岐にわたる。このようなアイデアのどれもが、過去に何回も提案されてきている。本書でも、特に第二十章に列挙している十項目のプランのなかでその概要を示してみた。しかしどれ一つとして、紛糾からの永続的な回復を促進するのに十分な活力と忍耐力、そして政治的洗練性を持って実施される可能性が高いようには思えない。欧州はしばしばこう言われてきた。

すなわち、何回も瀬戸際まで来て踏み止まり、その苦難から勝利を手に再び台頭してきた。しかし、今回こそは本当に違いかもしれない。我々の前には、救済ではなくさらなる困難を伴う長い期間が待ち受けている。それはジョージ・オーウエルの無慈悲な『一九八四年』に出でくる、オセアニア・ユーラシア・アイススタシアの間の不可解で果てしない紛争に似ている。<sup>(1)</sup> 債権国対債務国の闘争は、激烈で妥協を認めない敵対者相互間で起こる低レベルの交戦であり、無傷で勝利したり、生き残ったりする者は一人もいないだろう。このことの確実性に関してだけは意見の一致がある。これは將軍や指揮官がおらず、宣戦布告もない戦争であり、その行く末は混乱やプロパガンダ、誤った情報、半分だけの真実、嘘などによって曖昧模糊としたものになっている。

ユーロ地域とその多くの機関は、危機を管理するために膨大な金銭的および政治的な資本を投資してきているが、いまだに解決できていない。ユーロの多種多様な矛盾の背後には、明確な帰結に至る可能性を低くしている異質の分裂的な潮流が流れ込んでいる。我々が備えておくべきは、高らかに響き渡る成功でも破局的な失敗でもなく、疎遠や遅滞、そして膠着といった状態がさらに延長している局面であろう。

# 目次

序文 iii

はじめに iv

日本語版への序文 —— 日本と欧州の類似点

vii

第一章	不幸な家族	.....	I
第二章	幻滅	.....	II
第三章	ドイツ問題再論	.....	17
第四章	勝者と敗者	.....	23
第五章	危険な空白	.....	29
第六章	取り返しのつかない誤り	.....	35
第七章	技術官僚のつまずき	.....	41
第八章	ECBは他の中央銀行とは違う	.....	47
第九章	キプロスの騒動	.....	53

第十章	主権——転換点……………	59
第十一章	恐怖が鍵を握っている……………	65
第十二章	ドイツの限界……………	71
第十三章	フランスとの関係……………	77
第十四章	ブデスバンクの反撃……………	83
第十五章	イタリアでは土壇場が連続している……………	89
第十六章	銀行同盟の妄想……………	95
第十七章	IMFにとつての欧州の難問……………	101
第十八章	アングロ・サクソンの躊躇……………	107
第十九章	アジアのスター台頭……………	113
第二十章	戦争と平和……………	119

原注 9

索引 1